芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No. 47　55. 7

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・挾　間　正　年　編集人・尾　登　一　信

大分県の芸術文化活動に望む

大分県教育委員会教育長　友　田　享　史

このたび、全く思いもかけず大分県教育長の重責を負わされることになり、身のひきしまる思いをしている私でございます。

私は、学生の頃から教育者にあこがれ、実際、卒業後も一時教壇に立ったこともあり、教育行政に携ったこともございますが、それもはるか昔のことであり、今日、再び古巣に帰ってきても、今浦島のようなものです。

然し、そんなことを言ってはおられません。この重大な時機に、衆知を集め、私なりの眼で確かめて、一つずつ解きほぐしていく決心をしております。

教育は「心豊かな人づくり」だと思います。「美しい」ものを「美しい」と感じ、「人の情」に素直に感動し、何か自分の手や身体を動かして創りだしてみる。そんな人間に育っていってほしいと思います。

大分県は美しい自然と豊かな芸術の歴史をもっています。各地にのこる石仏や石塔は、祖先の素朴にして清純な生活を今に伝えていますし、田能村竹田の南画、福田平八郎、朝倉文雄、滝廉太郎のすばらしい芸術をうけついで、現在活躍中の高山辰雄先生、糸園和三郎画伯、中山悌一先生から立川清登さんの活躍まで、私たちの心に豊かな糧を与えてくれる人々は数えきれない程です。

こうした先達とともに、今、現在大分県に住み、大分県に育ちながら、着実に芸術に親しみ、文化を育てている方々に敬意を表したいと思います。

うけたまわれば、大分県芸術祭も16回の年輪を重ね、大分県芸術文化振興会議に結集する団体や個人の皆さんも郷土をみつめてすばらしい創造の成果をあげられているということです。

底辺を拡げるのか、より高いものを望むのかは古くして新しい問題ではありますが、大分県の芸術文化活動は、欲ばりのようでも、その両面を倶に求める必要があろうかと思います。

そのためには、学校教育における芸術部門にもっともっと力を入れねばなりませんし、公民館や文化会館を中心としてのサークルや講座も、いっそう充実させねばならないでしょう。その上に立って、各ジャンルの指導者の方々が積極的に手を貸していただくことにより、より高く、より深い作品と、より強固な組織が生まれてくるものと信じます。

昨年度から始められた「大分県芸術文化基金」の運動は全国でも高く評価されていると聞いています。どうか一日も早くこの運動が完遂され、経済的にも基盤が確立されて輝かしい大分県芸術文化活動の未来が開けるよう、私といたしましても出来るかぎりの条件整備をさせていただくべく努力致すつもりです。

皆さまの御健闘とご発展をお祈りして、一言ご挨拶といたします。

中国旅行雑感

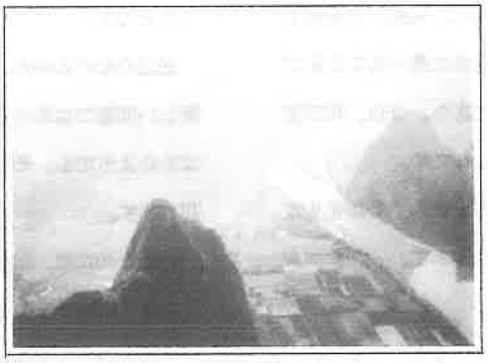
大分県教育委員会文化課長
大分県芸振会議事務局長　尾登一信

5月6日から10日間、第2回日中友好大分県民の翼訪中団の一員として、上海から桂林・武漢・北京と歴訪して来た。わずか10日間の旅ではあったが、同文同種、日本文化のふるさとであり、日中友好ムードの中、訪問の趣旨とも相まって、忘れえぬ旅になった。ここに与えられた紙数の中で、印象に残ったいくつかを描いてみたい。

1　桂林―南画のふるさと

東山魁夷の唐招提寺障壁画が完成して、奉納する前の一般公開が東京日本橋三越で行なわれ、たまたま上京して観覧の機会を得た。

直かに桂林の山々を見ては、まさに、そのとおり。東山芸術がいっそうの深みを増して私の心の中に映し出されてきた。南画のルーツは本当にあったのだ。しかも数尺の世界に縮められたものではなく、無限に拡がる空間の中の「存在」として私たちに迫って来た。



清江群峰

田能村竹田は恐らく桂林に行ったことはないであろう。もし、彼をして漓江のほとりに立たせていたならば、豊後南画は途ったものになっていたのではあるまいか。

2　湖北省博物館―古くして新しいもの

戦国時代末というから2千年の昔になる。楚の豪族「曾候乙」の墓を中心とした遺跡の大々的発掘が始まったのが2年前という。その出土品を特別展示してあった。「古くして新しいもの―文化財」というが、全くケタ違いのスケールである。棺、調度品、武器、装飾品、祭祀用具の数々……。眼を奪うどころの話ではなかった。中でも日本のテレビでも紹介された東洋最古、〔最大の楽器「鈕鐘甬鐘」は西洋のパイプオルガンにも比べられる打楽器で、65ケ2千瓩の鐘（鐘）よりなり、5人で演奏するという。その音を録音したテープとともに、中国文化の深渕を見せられた思いがしたものである。

又、人民公社の高校生や武漢外国語学校の女生徒、それに歓迎の雑技団オーケストラによる演奏が、すべて中国の伝統楽器によるものであったこととも考え合せて、「近代化」政策を進める中で、確固とした歴史と伝統の上に立った文化の発展を期している姿に感じるところが多かった。

3　中国の友人たち

団長（知事）は団長としての公式な友人ができたことであろうし、日中友好協会としても、古い友人と再び三たび友情を温めたことであろう。私は私なりに3人のお友達ができたことを喜んでいる。

邓桂栄女史（とうけいえい）―武漢外国語学校日本語教師

彼女は今度日本との提携による北京語言学院での1年間の研修受講試験に難関を突破して合格し、来年1ケ月の日本留学も予定されているとでか。再会を期待したい。

馮麗敏さん（ひょうれいびん）――武漢大学日本語科3年生の学生さん

聡明な彼女は必ずやよき日本文化の理解者となるであろう。

周寧東君（しゅうねいとう）――桂林市の労働者。寸暇を惜しんで独学で日本語を学んでいる。

俳句を理解したいという彼。異常なまでの探求心。私たちはもっともっと努力をしなければなよない。

以上の3君と手紙や写真の交換、書籍の送付を行なっているが、いささかでも民間外交の一助ともなれば幸だと思っている。

[redacted]

上田　保氏を偲んで

県芸振会議理事　宮　瀬　香多士

ふつう芸術文化関係者は、基金集めや県との折衝ごとなどは、不得手な人が多いように思える。かつて「美術博物館をつくろう」という声が県芸振会議から起こったときも、だれに会長になってもらうかが大きな問題であった。強力に運動を進めるには、社会的に影響力があり、かつ実行力のある人に就任していただかなければならない。もちろん芸術文化への理解もなければならない。そんなとき、期せずして推された人が上田保氏であった。

会長就任を、お願いに行ったときは、なかなか引き受けてはいただけなかった。だが、一度引き受けられると、期成会のメンバーのだれよりも、大きな熱意をそそいで活動された。こんな上田会長の熱意によって、理事会の出席率も、たいへんよかったことを覚えている。

また「紫の羽根募金」「愛蔵品オークション」なども開き、積極的に美術博物館の実現を働きかけられた。こうした社会的アピールとともに、企業関係にも働きかけ、多額の基金を集められたが、これらは上田会長でなかったら、なかなかできぬことであったと思う。

会長を引き受けられたあと「こういう公的な仕事は最後のことだと思うから…」と私に言われたことがあるが、それだけに一通の文書づくりにも厳しい態度でのぞまれた。

美術博物館の建設は、まず県立芸術会館として実現したが、期成会での上田会長の努力がなかったら、とてもこう早く実現してはいなかったのではなかろうか。それほどの力を尽されたのに、芸術会館開館の日のあいさつでは、ご自分のやったことには一言もふれられなかったと聞いている。いまさらながら上田会長の大きさ、深さに打たれる思いであった。名利を求めぬ情熱…そんな心を私たちも受けついで行かねばならないと思うと同時に、大分県の芸術文化界は大きな理解者・後援者を失ったと思う心、切である。

一つの提言 ―県短文学界へ―

県芸振会議理事　倉　田　紘　文

「里謡部門に限らず、短詩形全体に若い人たちの創作が見られなくなって久しい」と、『大分県文化年鑑』'79の「里謡」の項に土屋北彦氏は書かれている。この一文はまさに県短文学界の今日の悩みの中心点を鋭く突いている。

しかし、一方において同年鑑は「個人詩集の出版はここ二、三年の傾向に引きついで今年も又盛況だった」（詩の項）をはじめ、短歌・俳句・川柳の各部門の各種大会・同人誌等の参加者急増による盛況を伝えている。

この二つの現象はとりもなおさず初心者および従来よりの同好者を含めて、各参加者の高齢化を示しているのである。

現在、県単位での一般に開かれた短詩形文学の総合的集いは、県・県教育委員会・西日本新聞社の共催による「大分県短文学大会」（八月）だけである。そしてその参加者の人数も、また年齢層もさきの年鑑の伝える結果とほぼ重なっている。参加者の増加は実に喜ばしいのであるが、その中に若い人の姿が見られないことに対しては逆に大きく嘆かねばならない。

そこで私は一つの提言をしようと思う。それは県内の中学生・高校生・大学生を対象とした「大分県学生短文学大会」の実施である。幸いに大分県には「県詩人協会」「県歌人クラブ」「県俳句連盟」「県川柳連合会」「里謡大分」と、それぞれのジャンルの団体が組織されている。

芸振会議が「振興」の意をもって媒介の労をとり、この五つの団体の共催の下に大会を開き、次代をになう若い人達の創作活動を促してはいかがであろうか。

だが、一つだけ付け加えるとすれば、仮にそのような大会が催されたとしても、若い人達の実際の誘いは各団体部門の努力を待たねばならないということである。

宮崎　豊・喜寿記念展によせて

大分県美術協会長　進　来　　哲

前大分県美術協会長の宮崎豊さんが、喜寿を記念して、若い時から今までに及ぶ作品の中から自選されたものの個展を開かれるという。美術協会の大先輩としての画歴などいまさら私があらためて申しのべることはないと思う。たゆまず、黙々と描いて来られた作品群には、必ずや、深い感銘が得られるであろうと、ここに一覧をおすすめする次第である。

絵は自分の感じたことを率直に表現するもの、とはわかっているが口でいう程簡単にいかない。勿論テクニックだけでは描けない。その人の感性、人間性、環境等々と内面的なものが絵に出て来る、そこでこわい所でもあるし、面白い所でもある。その点この先輩のひょうひょうとして、暖かく、誠実な人柄はいつも作品の上に漂っている。人にテラワズ、謙虚な作品はいろんなことを教えてくれる。なお、文化基金にもすすんで協力して下さる御厚情に感じいる次第である。

[redacted]

波紋

大分県美協15周年記念特別展を考える

この3月に『大分県美術協会15周年記念特別展』が開かれたが、これには4つの意味があると思った。

(1)　**15年目にして2度目の三者合同展**＝県美協には日本画、洋画、彫刻、工芸、書道、写真の6部門があるが、自主企画による合同展は、昭和40年に（日・洋・彫・工部を擁する旧県美協と旧書道協会、旧写真作家協会が統合した年）トキハで開いた統合記念『大分県美術協会20年展』以来のことである。

(2)　**内容のちがい**＝20年展の時は、旧三協会の過去の上位入賞作198点（日25、洋68、彫4、工13、書45、写43）を陳列してそれぞれの歴史をふりかえったのに対して、今回は統合以来15回の県美展で会員受賞の作家および協会運営に功績のあった役員と名誉会員の新作（未発表）226点（日17、洋74、彫5、工6、書90、写34）を展示して、現在の県美協のレベルを見てもらおうというもの

(3)　**ここに至るまでの経過について**＝40年に三者が大同団結して県民文化の向上を計ろうと話しあったが、当時の展示場はまだトキハのホールしかなかった。これからは県美協の力で美術館を建てて三者合同の美術展をやろうと夢みた。同年に発足した芸振会議は大分市に文化会館の建設運動を起こし、翌年待望の館が完成した。しかし、県美協などが要望した本格的な美術展示場は望めなかった。41年の県芸術祭運営委員会は、不備な会場を知りつつその秋の芸術祭開幕行事として松方コレクション展を引いたが空前の人気をよんだ。この人気がかえって文化会館の狭さを指摘し、美術館の必要性を県民の間に広げたといえる。そのためか松方展の益金3百万円が美術館建設基金として大分県に寄贈され、ここから正式に県立美術館建設運動が展開される。現在の芸術会館に至るまでには議論百出、紆余曲折したことは周知のとおりである。

(4)　**夢の実現**？＝52年に県立芸術会館ができたものの、三者は依然として別々の県美展を開催してきた。芸館もやっぱり三者合同の県美展が開ける広さではなかった。しかし、この殿堂で合同展をすることが夢だったとするならば、内容をしぼってもこの15周年はチャンスである、というのが今回の展覧会ではなかっただろうか。

（S）

日出町文化活動の現状

日出町文化協会事務局長　佐藤　暁

日出町の文化活動が本格化したのは、昭和四十二年の明治百年記念の芸能祭と文化展に始まる。この芸能祭と文化展に参加した文化団体はわずか九団体であり、そのほとんどが民謡や日舞のグループであった。しかし、これが契機となって年一度の発表の機会と場を持ちたいという意欲が焔え上がり、昭和四十四年七月には十八団体が集まって、日出町文化協会を設立した。それ以来、毎年十一月三日の「文化の日」を中心に会期三カ月で日出町総合文化祭を開催している。昭和五十一年までは公場が無いために日出中学校の体育館を借用して展覧会を開くのがやっとで、協賛事業として、囲碁大会や菊花展を開くのがやっとの状況でした。昭和五十一年九月、新しく日出中央公民館が完成し、その全館を使って総合文化祭を開いたときは、文化協会の役員は、ニコニコ顔でした。芸能大会はホールで、菊花展と書道、絵画展はピロティーで、というように新築の中央公民館全館の全室が開場となる有様で、それ以来、俳画、紙人形、手芸、書道、絵画などの部門のグループが増加し、芸能部門でも日舞、舞踊、詩吟、謡曲、神楽、コーラス等のグループが増加し、現在五十二グループが参加するようになってきた。このような日出町文化協会参加団体、グループの増加と共に、文化協会も過去のような行政指導型から脱皮し、文化協会の自主的運営による日出町総合文化祭の運営と実施が、新しい課題となってきて昭和五十三年、昭和五十四年の二年間、理事会による文化祭の運営が手さぐりながらも試みられてきたが、本年度こそは本格的な自主運営をめざして取り組み中である。

昭和五十五年の日出町総合文化祭は、十一月一日より三月までの開催予定である。

大分県芸術文化基金・昭和55年度募金計画について

大分県芸振会議事務局次長　徳丸欽也

芸振№46号（前号）で報告しましたが、この運動の第1年目でありました昨年度は、皆様の御支援によりまして目標額（2,000万円）を達成することが出来ました。ここに感謝いたしますとともに、本年度の募金計画を説明いたします。

＜芸振加盟団体・個人会員＞　目標額　450万円

6月20日、大分県芸術文化振興会議の総会を大分市で開催し、昭和55年度の計画を承認いただきましたが、特に、募金事業の受益団体でもある芸振会議としては、本年度の割当目標額達成のため一層の運動をお願いします。手続きについては、昨年と同様に、各団体毎に一括取りまとめのうえ指定された口座に振り込むか、又は、持参いただくことで現在資料の準備をしております。

＜企業体（法人）＞　目標額　900万円

昨年10月31日に、大分県芸術文化基金促進協力会が発足、募金活動の窓口を一本化するとともに、全体計画（1億5千万円）の承認を受けましたが、年次計画にとらわれず出来る限り早期に目標達成を図ることが望ましいとの意見もありましたので前年度に引き続き、強力に企業体にお願いする計画であります。

＜一般・個人＞　目標額　150万円

昨年は、県庁職員、教育庁関係職員、県立学校教職員に呼びかけを行ったところ予想以上の募金が集まりました。更には個人の大口寄付、香典返しの寄付等で目標額を大幅に上廻りました。本年度は義務教育諸学校教職員に趣旨を御理解いただくよう広報活動に力を入れるとともに、一般の方々からも広く浄財を集めるよう努めます。

＜募金計画＞

区分		昭和55年度寄付目標額
芸振加盟	個人会員	4,500,000円
	団体	
企業体（法人）		9,000,000円
個人・一般		1,500,000円
合計		15,000,000円

大分県芸術文化振興会議役員・事務局職員

昭和55年度・50音順

役職名	氏名	団体名	住所	〒	TEL
顧問	河野　彰		大分市		
〃	佐藤義詮		別府市		
〃	辻　英武		大分市		
〃	米田貞一		別府市		
会長	挾間正年		大分市		
副会長	辛島武雄		大分市		
〃	進来　哲		別府市		
〃	糸永正武		大分市		
〃	宮崎　豊		大分市		
監事	小長久子		大分市		
〃	田村卓夫		大分市		
理事	安部遊雲	県美術協会副会長	別府市		
〃	江藤豊南	別府民踊百踊会事務局長	別府市		
〃	遠藤梢山	県三曲協会会長	大分市		
〃	大崎聡明	県美術協会副会長	大分市		
〃	岡　博	大分市教委社会教育課長	大分市		
〃	木村成敏	県文化団体連絡協議会理事	大分市		
〃	倉田紘文	県俳句連盟理事	別府市		
〃	菅　久	県芸振会議事務局担当	大分市		
〃	園田喜平	県民踊連盟副会長	大分市		
〃	田川　奨	県美術協会副会長	杵築市		
〃	中沢とおる	県民演劇制作協議会事務局長	大分市		
〃	中野幸和	県職場音楽連盟理事長	別府市		
〃	仲町謙吉	県美術協会委員	大分市		
〃	波多野義孝	県宣伝美術協会会長	大分市		
〃	花柳寿三鶴	県日本舞踊連盟代表	大分市		
〃	樋口愁枯	県洋舞踊協会会長	日田市		
〃	深田光霊	日本詩道会会長	大分市		
〃	丸岡　久	大分音楽友の会会長	大分市		
〃	三河尻修二	県児童文化研究会会長	大分市		
〃	宮瀬香多士	大分合同新聞文化センター	大分市		
〃	脇　正人	県美術協会事務局長	大分市		
事務局長	尾登一信	県教委文化課課長	大分市		
次長	徳丸欽也	県教委文化課課長補佐	大分市		
〃	広瀬晴四郎	県美術協会会員	大分市		
〃	藤原嘉久	県層雲会員	大分市		
事務局職員	児玉照明	県教委文化係長兼文化専門員	大分市		
〃	石黒富士男	県教委文化課庶務係長	大分市		
〃	佐藤七夫	県教委文化課主査	別府市		
〃	十時　良	県美術協会会員	大分市		
〃	辛島光義	県音楽協会会員	大分市		

昭和54年度決算書

大分県芸術文化振興会議

収入の部

区分	当初予算額	補正予算額	予算現額	決算額	差引増減額
補助金収入	870,000	0	870,000	870,000	0
県費補助金	870,000	0	870,000	870,000	0
会費収入	668,000	△28,000	640,000	640,000	0
団体会費	528,000	△12,000	516,000	516,000	0
個人会費	140,000	△16,000	124,000	124,000	0
雑収入	295,513	0	295,513	298,305	2,792
広告料	290,000	0	290,000	290,000	0
預金利息	5,513	0	5,513	8,305	2,792
繰越金	21,487	0	21,487	21,487	0
合計	1,855,000	△28,000	1,827,000	1,829,792	2,792

支出の部

区分	当初予算額	補正予算額	予算現額	決算額	差引増減額
賃金	450,000	0	450,000	450,000	0
報償費	135,000	0	135,000	135,000	0
旅費	100,000	△ 8,000	92,000	81,430	10,570
需用費	1,041,000	△40,000	1,001,000	987,230	13,770
印刷消耗費	1,006,000	△40,000	966,000	954,630	11,370
食糧費	35,000	0	35,000	32,600	2,400
役務費	90,000	0	90,000	90,000	0
通信運搬費	90,000	0	90,000	90,000	0
使用料及賃借料	30,000	0	30,000	23,200	6,800
予備費	9,000	20,000	29,000	26,330	2,670
合計	1,855,000	△28,000	1,827,000	1,793,190	33,810

次年度へ繰越　1,829,792－1,793,190＝36,602

昭和55年度予算書

収入の部

区分	当初予算額	前年度予算額	比較増減	積算基礎
補助金収入	870,000	870,000	0	
県費補助金	870,000	870,000	0	
会費収入	658,000	640,000	18,000	
団体会費	528,000	516,000	12,000	3口 6,000円×88 ＝528,000円
個人会費	130,000	124,000	6,000	1口 2,000円×65 ＝130,000円
雑収入	358,398	295,513	62,885	
広告料	350,000	290,000	60,000	文化年鑑 1頁30,000円× 11頁＝330,000 芸振 5,000×4口 ＝20,000
預金利息	8,398	5,513	2,885	
繰越金	36,602	21,487	15,115	
合計	1,923,000	1,827,000	96,000	

支出の部

区分	当初予算額	前年度予算額	比較増減	積算基礎
賃金	450,000	450,000	0	事務局員賃金 75,000円× 6カ月＝450,000
報償費	140,000	135,000	5,000	年鑑執筆謝品代 2,000円×35 ＝70,000 年鑑編集謝金 5,000×9＝45,000 芸振編集謝金 5,000×4＝20,000 賞品代5,000円
旅費	90,000	92,000	△ 2,000	芸術祭参加行事調査、芸術文化基金説明会等
需用費	1,115,000	1,001,000	114,000	
印刷消耗費	1,080,000	966,000	114,000	芸振80,000円×4回＝320,000 年鑑900円×800部 ＝720,000 事務用品40,000
食糧費	35,000	35,000	0	理事会、事務局会議
役務費	96,000	90,000	6,000	
通信運搬費	90,000	90,000	0	切手、ハガキ
手数料	6,000	0	6,000	払込手数料
使用料及賃借料	20,000	30,000	△10,000	理事会等、会場費
予備費	12,000	29,000	△17,000	
合計	1,923,000	1,827,000	96,000	

《れんさい》 豊後水道の文芸 その7

大分大学教授　佐々木　均太郎

林 房雄「青年」と豊後水道

大分市出身作家林房雄は、さまざまな評価を受けながらも、ともかく昭和初期から戦後にかけて日本文学界を大きくリードした小説家である。

彼の長篇小説「青年」は、昭和九年三月中央公論社から出版された。主人公となる二人の青年は、幕末における長州の士、志道聞多（井上馨）と伊藤俊輔（伊藤博文）。ロンドンに在留していた二人は欧州文明の大きさを知り開国論に傾いていく。折しも長州藩は外国船砲撃を開始。そのニュースをロンドン・タイムズで知った二人は、パロッサ号に便乗し急遽日本に引返す。明治維新の主動力となったこれら青年の理想の姿を感動をこめて描いた歴史小説である。この作品の中に豊後水道が舞台とされて描かれている。パロッサ号は横浜から瀬戸内海を西へ向い「六月二十三日の夜五ツ時、豊後水道の水に砲船燈の火を浮べて姫島の沖に到着した。」

「風が海峡をわたると、波がいっせいに白い手をあげる。豊後水道の波は笑ふ子供の歯のやうだ。けれども、波がパロッサ号の船腹を静かにえぐり、碇綱をきしませ、帆柱をわづかな角度に傾け、五十メートルの海面をまつすぐに走つて、姫島の岩に近づくと、人はそれが手であることに気がつく。波は、岩の裂目のひとつひとつで、まつ白な手を思ひがけない高さにながながと延し、指をひろげてみせるからだ。」と豊後水道の波を細かに描写している。

また「青年」第三章の中で豊後水道を讃えて次のように綴っている。「ああ、日本の海は、南の海は、どうしてこのやうに美しいのであらう！　この海の岸の白い砂の上で育つた作者は、物語の筋のみちびくままに、この南の海にかへつてくるとき、ほのぼのとよみがへる少年の日の胸のときめきを感じる。波の色と海岸の匂ひと、鷗の白いひるがへりと、細い紅色のその嘴と、渚を走る少女たちの白い足。」と。

芸振だより

＜消　息＞

さきに行なわれた昭和55年度県芸振総会において、新年度役員が前掲の通り選出されたが、新任・退任については次の通り。

（新任）

副会長	糸永正武	県高文連会長
理事	倉田紘文	県俳句連盟理事
事務局次長	徳丸欽也	文化課長補佐
事務局員	児玉照明	文化係長兼文化専門員
〃	石黒富士男	文化課庶務係長

（退任）

副会長	帆足敏郎	大分女子高校長
事務局次長	後藤昭六	歴民館準備室主幹
事務局員	二宮重幸	県立図書館主任社教主事

＜催しのお知らせ＞

◎高山辰雄展

◦昭和55年8月30日（土）～9月23日（火）

◦大分県立芸術会館＜休館9月1（月）8（月）16（火）22（月）＞

◦入場料　一　般　500円（400円）
　　高・大生　300円（200円）
　　小・中生　200円（100円）
　　（　）は前売及び20名以上の団体料金

昭和55年度移動芸術祭・巡回公演

◎日本舞踊協会　公演

9月8日（月）県立芸術会館　18：00

演目　長唄「手習子」「水仙丹前」など

◎人形浄瑠璃・文楽座　公演

9月27日（土）佐伯文化会館　18：00

演目　摂州合邦辻　合邦住家の段など

◎現代舞踊協会　公演

10月16日（木）竹田文化会館　18：30

演目　モダンダンス「欲望の街」など

かわの眼科

河野　彰

大分市府内町2丁目5－9（トキハ北口通り）

TEL　大分（0975）32－2480
36－7547